

親子の対話型読み聞かせのための 記録システムに向けたインタビュー調査

清水 啓太郎¹ 佐藤 安理紗 ジェンジェラ¹ 矢谷 浩司¹

概要: 子どもとの対話コミュニケーションの重要性について多くの研究が示唆しているにもかかわらず、子育て親は忙しさが増しておりコミュニケーション機会を確保することは難しくなっている。本研究では対話コミュニケーション機会として親子の読み聞かせ活動に着目し、活動への意欲や対話型読み聞かせを促すためのシステムデザインを検討する。そのために読み聞かせに際しての親子を取り巻く環境についての状況や、やりがい、続ける上での課題や、システムデザインを踏まえたセキュリティ意識などを把握するために、子育て親に対してインタビューを実施し定性的な調査をおこなった。インタビュー結果を元に考察をおこない、子育て親が振り返りながら対話型読み聞かせを続けていくためのシステムデザインについて検討した。

A Qualitative Study for Designing a Capture and Access System for Parent-child Storytelling

KEITARO SHIMIZU¹ ARISSA J. SATO¹ KOJI YATANI¹

1. はじめに

共働きが増える現代社会において、子育て親は子育てのための時間を確保しづらくなっており [2]、子どもたちもまた、習い事などで多忙な毎日を送るようになってきている。親子双方が忙しさを増した中、その重要性 [1] にも関わらず親子のコミュニケーションを意識的に取ることは難しくなっており、日々の生活の流れの中に、コミュニケーションの機会を設ける必要があると考えられる。デジタル化や便利な家電により、家事や教育の効率化が図られる一方で、現代の共働き家庭や多忙な子どもたちの状況に適応するため、親子のコミュニケーションにも変化が求められている。子育て親、子どもが忙しい中でコミュニケーションの質を高めることが今後より一層重要になっていくと考えられる。多忙な子育て親が無理なく子どもとのコミュニケーション機会を確保し質を高めるためには、新たな活動時間を設定するのではなく日常生活の中ですでに行われている活動を利用することが望ましい。そこで我々は多くの親子に親しみがあり子育ての定番として取り組んでいる、絵本の読み聞かせ活動に着目し、習慣化されている重要な親子のコ

ミュニケーション機会と捉え、効果を高めていけるようなシステム、ユーザインタフェースの実現を目指す。

対話型読み聞かせの効果に関する研究知見を踏まえ我々は、子育て親が対話型読み聞かせを楽しく続けていくことのできるような支援を可能とするシステムのデザインを検討する。本研究はそのようなシステムデザインをするために必要となる読み聞かせに際した親子を取り巻く状況についての理解を目的とする。そのため日頃読み聞かせをおこなっている子育て親に対してインタビューを行い、現在の状況や課題を整理した。

2. 関連研究

2.1 親子のコミュニケーション

親子間の対話コミュニケーションについては、その影響や重要性について多くの研究で示唆されている。Mermelsh-tine[10] は親子間の頻繁な相互作用が子供の認知、言語、社会的、感情的発達にどのように寄与するかを調査している。子供と親が共有する対話や活動は、子供の学習能力と社会的スキルを向上させることが示している。Hart[7] は、親子間の対話の量が子どもの語彙発達に大きな影響を与え、日常的な親子の会話が子どもの語彙と言語理解の成長に重

¹ 東京大学 Interactive Intelligent Systems Laboratory

要であることを示している。Finkenauer[5]は、親との開放的なコミュニケーションがどのように若年層、子供の精神面や行動への貢献するかを示している。

また一部の研究は、デジタルテクノロジーの使い方や頻度によっては、親子の対話が妨げられてしまうとしたことも示唆している。Woodward[14]はデジタルテクノロジーの使用が家族の日常のコミュニケーションパターンをどのように変えるかを調査しており、結果としてテクノロジーの使用が親子の直接の会話を減らす可能性があるとしている。[8]は、親子間のテクノロジーを介したコミュニケーションが増えたことで直接の対面でのコミュニケーションが減り、それが子供の生活満足度に影響を与える可能性を示している。このような研究から、システムをデザインする上ではテクノロジーの使われ方についての配慮が必要であることが理解できる。

2.2 対話型読み聞かせ

以上のような親子の対話に関する研究を踏まえた上で、私たちは親子のコミュニケーションの質向上の機会として、親子での本の読み聞かせ活動に着目した。主な着目理由は下記の通りとなる。

- 多くの家庭でも多く行なわれている普遍的な親子活動であること。図書館などの公的な施設をつかえることから経済状況による影響を受けにくく、多くの家庭で取り組みやすい。
- 寝かしつけなどを理由にすでに行われている活動を活用するため、子育て親に新しく長時間を確保することを強いる必要性がないこと。
- 読み聞かせの仕方は家庭により異なり、コミュニケーション機会としての質の向上する余地があると推測されること。
- 行われる場所や時間帯などからリラックスした状態で対話によるコミュニケーションが行われやすい場面になっていること。

親子の会話などのコミュニケーションを交えた本の読み聞かせが、その教育効果の高さから注目されている。対話型読み聞かせは、子どもの言語発達に大きく寄与する活動といわれていており、教育手段として多くの研究者が調査を行なっている。いくつかの研究では対話型の読み聞かせが子どもの語彙力と文法的な理解力を向上させることを示し、質問に基づく読み聞かせが有効であることを報告している [13] [3]。Dickinson[4]は、子どもの言語能力の向上に役立つことが示され、質問や情報提示などの対話的なアプローチが重要であるとの見解を示した。Hargrave[6]は、子どもの識字能力とスペルの向上につながることを示し、質問や対話的な読み聞かせが特に効果的であると結論づけた。

Justice[9]は、子どもたちのプリント認識能力の向上に役立つことが示され、また読み手が子どもに対話的な問いか

けをすることで、効果がより高まることを報告している。

こうした研究において、対話型読み聞かせが子どもの傾言語的能力を中心とした能力発達に寄与するとするという見解を示す一方で、その他の研究では親子のコミュニケーションや関係性について言及している。

Sénéchal は [12] は対話型の読み聞かせが、子どもの識字能力と学業成績に良い影響を与えることを示し、質問や対話的な読み聞かせが、長期的な親子関係においても有効であると報告している。Shaneha[11]は読者の言語的行動と非言語的行動の両方を分析した。研究の中で親と子の両方がお互いの非即時の話に貢献しており、親と子の間には対称性があると主張している。また物語の内容を超えて、親子でお互いの話し合いに重要な役割を果たしていることを示し、親子の協力的行動の定義と、実態を調査している。

このように対話型読み聞かせは子供の能力向上のみならず、親子のコミュニケーション・関係性改善においても一定の効果があると考えられる。一方で、日々多忙な子育て親にとって対話型読み聞かせを続ける意欲を維持することが難しい。また、どのような読み聞かせが良いのかについて頭を悩ませることが多い。

3. インタビュー調査

3.1 インタビュー内容

一般家庭において親子がどのような環境・状況で読み聞かせに取り組んでいるかについて把握するために、インタビュー調査を行った。まず親子の読み聞かせ活動に関わる環境・状況の全体像を把握するために、時間帯や場所、頻度、子どもの年齢や兄弟状況についての質問を行った。その上で読み聞かせをしている背景や、どのような読み方をしているかやコミュニケーションの実態についての質問をおこなった。読み聞かせ活動についての実施状況や実施する上での課題、発生している親子間のコミュニケーション [11]、やりがい、活動に必要な情報、システム上でセンサーを利用する上でのセキュリティ意識などについてインタビューを行った。本調査でのインタビューにおける主な質問事項について表 1 に示す。

3.2 実験参加者

他の関連研究を参考に対話型読み聞かせの効果が高いとされる 1~6 歳の子どもがいる子育て親を対象にインターネット上での募集を行った。子どもが 1 人でも対象年齢該当していれば、兄弟の年齢は問わないものとした。本研究の目的は読み聞かせの実態の調査であるため、日常的に（直近 1 ヶ月を目安に 1 回以上）読み聞かせをしている人を対象とした。

インターネット上で募集を行い、読み聞かせを行なっている 20~40 代の男性 5 名女性 12 名、合計 17 名の子育て親に対してのインタビューを行なった。なおデバイス利用

に関する意識などの一部の質問については10名に対してインタビューを行った。1～6歳の子どもに対して日常的に(直近1ヶ月を目安に1回以上)読み聞かせをしている人を対象とし、1人に対して30～60分のインタビューを行った。なおの対象者の子どもの平均年齢は3.6歳となった。こうした条件でCrowdworksを使って募集を行い、謝礼としてAmazonGiftCardで1,000円分を参加者に送付した。

表1 インタビュー参加者への質問事項

読み聞かせの実態
いつ、どこで読み聞かせをしているか。
どのくらいの頻度で行っているか。
なぜ読み聞かせをしているのか。
読み聞かせをするときにどんなことに気をつけているか。
子どもとどんなコミュニケーションをしているか。
課題・ニーズ
読み聞かせをする上でどんなことに悩んでいるか。
やりがいを感じたタイミングはあるか。
大変さや苦痛を感じたことはあるか。どんな時か。
本をどのように選択しているか。
どんな情報があると本を選びやすくなるか。
アプリやデバイス利用への利用意識
関連するアプリなどを使ったことがあるか。
アプリなどを使ってみたいと思うか。
室内でカメラを使うことに抵抗があるか。
室内でマイクを使うことに抵抗があるか。

4. 結果

4.1 読み聞かせの時間と場所

まず家庭内で読み聞かせが行われる時間や場所についての実態についての質問をおこなった。読み聞かせをおこなうタイミングについては子どもが寝る前といった回答が17人中10人もっとも多く、子どもの寝かしつけの手段として読み聞かせをおこなっているという実態が多かった。次いで夕食後に行っているという意見が多く、忙しさがひと段落した家族がリラックスする時間帯に読み聞かせなどの親子活動を行うという回答が見受けられた。場所については家の寝室リビという回答が17人中8人が最も多く、次いでリビングという回答が多かった。

4.2 読み聞かせを始めた動機

子育て親が読み聞かせを始めた動機については多岐に渡ることがわかった。まずは親子でのコミュニケーション機会づくりを目的としているという回答が見受けられた。

「親子のコミュニケーションの時間としています。」(P13)

「お兄ちゃんとの時間が持たなくなっちゃうので、それでちょっと絵本を始めた感じですね。」(P6)。

また、子ども言語能力の発達や学力、創造性の向上などを目

的としているという回答が見受けられた。

「字が早めに読めるようになったほうがいいかなと思っているのがきっかけ。」(P5)

「スマホとかテレビとかいろいろとデジタルな誘惑がある中でもそっちばかりになってほしくないから活字とか絵とかなんかそれを通してやっぱりストーリーの中でいろいろ想像を働かせてほしい。」(P5)

その他にも、子どもの心理的安全性の向上、芸術鑑賞、また純粋に本を好きになってほしいといったように多岐に渡る回答があった。

4.3 読み聞かせ中・前後のコミュニケーション

読み聞かせ中に言語・非言語にかかわらずさまざまなコミュニケーションが取られていることが判明した。絵本の内容に関する会話をする親子がいるの中、ほとんどがそこから脱線しさまざまな雑談をしているという実態が明らかになった。また雑談や脱線の始まり方としてさまざまなケースがあることがわかった。

たとえば絵本を読んでいる最中に気になることがあった場合に、中断して会話を始めたりすることがある。

「やっぱり絵を見て不思議に思ったっていう時とかは聞いてくれたりします。」(P9)。

「本として情報が盛り込まれたものを読んだりしてるので、そうすると、これって何っていうようなそもそもの質問のところから結構突っ込まれたりするので、そうするとまあちょっと一回脱線してそっちの説明をする。」(P7)

「絵本とかであるとかタマムシの話をしたりとか、一番下の子だとカエルがいるとか、絵本で言うにああそうだねみたいになんかちょっと中断したりとかはしています。その絵本で気付いたことがあると、子供達がお母さんこれこれみたいな話してきてるのでまあそうですね。その絵本の絵を見ながら話したりもしますね。」(P6)

「脱線するみたいなものが多い感じですね。ああでも常日頃そうかって言われるとそうでもないけど、例えばうちの子供達こう絵本とか読んで出てくるし、食べ物とか結構好きなんで、何かこれってどんな食べ物だろうね。」

また、絵本の中の登場人物の心情への着目をきっかけに雑談を始める場合もある。

「その間に自分の思ったことを入れたりとか、例えば主人公は何でこんなことを考えたんだろうとか話しています。」(P17)

子どもが気になったところから始まる場合もあれば、日常生活での経験と紐づいて親子双方から話を始めるケースもある。

「脱線するみたいなのが多い感じですね。例えばうちの子供達こう絵本とか読んで出てくるし、食べ物とか結構好きなので、これってどんな食べ物だろうねなどと。あとはスーパーで見た食べ物が絵本にでてくると、この間見たやつだといったような形で話し始める。」

また一部の親は、本を読み終わった後に振り返りとして読んだ内容の確認などを行なっている。

読み終わった最後に、テストのようなものをして確認する。お話をふかえりをする。親が意識的にしている。(P7).

言語的コミュニケーションが多く取られる中で、非言語的なコミュニケーションも発生している。例えば、会話の始め方として絵本の気になったところで指を指して始める場合が多い。

「気づいて指を指したりとかして自分で遊んだりするので、その子供が指さしたものを「これ何」みたいな感じで言葉のコミュニケーションでやります。」(P13)

また、子どもが自分の興味・好奇心からページを前後にめくると言った行動を行うこともある。

「読んでる最中に、もう自分でめくろうとしたりとか前のページに戻っちゃたりもします」(P10).

4.4 読み聞かせのやりがい

読み聞かせに関する親のやりがいとして、17人中7人が「子どもが楽しんでいること」と回答した。

「声色を使ってした時に、本当にちょっと怖そうな顔をしたりとかで、娘の目が本当に、キラキラと輝く瞬間があるんですよ。良かったって思いますね」

「本を読んでいて集中して目をキラキラ輝かせる時は、凄くなんか親として、読んでやってよかったなっていう気持ちはあります。」(P1)

次いで、17人中5人が「子ども理解していたり覚えていくということがわかる」と答えた人もいた。

「読み続けるにつれ理解してるのかなって思うときはホッあたりはしますね。」(P10)

「この前本に出てきた話だねみたいなことを本人が覚えて覚えていてくれると、やっぱり嬉しく思いますね。」(P18)

ほとんどの親が子どものためにしているということをやりがいに感じている一方で、一部の親は自分自身が絵本が好きで続けているという回答もあった。

「2週間に一回新しい本を借りてくるんですけど、その時に新しい本を読むのが私は楽しかったりかします。」(P6)

4.5 課題意識やストレス

多くの親が子どものために読み聞かせをすることをやりがいに感じている中、一方でストレスになってしまうケースも回答の中で目立った。親がストレスと感じる要因の一つに、親と子で読み聞かせをしたいタイミングが異なってしまうことが挙げられる。

「自分のタイミングたちと違う時にこうお子さんで本を持ってこられてみたいなところですよ。そうですね。今、そういうタイミングじゃないみたいだね。まあ、たまにありますよね。」(P10)

「自分もこれやりたいんだけどなっていう。その親タイミングでなってるのはそれはそれであるじゃないですか。」(P4)

また、本の読み方や内容として子どもに繰り返しを要求されることや、親の望む読み方・本選びができないことなども、ストレスの要因として挙げられている。

昨日第1章を読んだから今日第2章を見せたいのに、第2章を読んでくれないみたいなそういうストレスってなりそうですね。(P4)

「これはもう赤ちゃん向けだよって言っても、なんだかかわいそうかなと思って今は特に。あいんじゃないってそれを借りてくるんですけど。そういう時はどうしてあげるのがいいのかなど」(P16)

兄弟がいる場合は、兄弟に対しての読み分けを課題に感じるという回答が多く見受けられた。

「子どもが一人だったときは、こう静かにお膝の上に乗ってこう最初から最後まで寄り道しながらも着地できたんですけど、二人になってからは何かその、何だろうと前のページに戻ってとか、あとは本を途中でこう奪われて喧嘩になったりとかわりと。スラスラ読めないことは多いかなと思ってね」(P12)

4.6 可視化してほしい情報

子育て親が本を続けていく上では、課題の解決や子育て親の意欲維持などが必要となる。こうした点の解決につながるような情報の可視化についても質問を行なった。可視化してほしい情報については、「読書履歴」という回答が17人中6人となった。

「一昨日これ読んだぐらいやったら分かるんですけど、1か月前にこれ読んだとかは、実際覚えてないと思うんですよ。そのあたりのサポートはいいかと思います。」(P9)

「何冊読むぞってなってきたとしてで、そのモチベーションの為に見える化してたら、それは役立つと思う。親のモチベーションにはつながるかなと思います。」(P5)

また、同じく 17 人中 6 人が「興味・関心キーワードの提示」という回答であった。具体的な興味・関心キーワードの活用の仕方を考えている回答も見受けられた。

「読んで一番盛り上がる場所の部分はしっかり読みたいな。その辺の力加減が分かればいいと思う。」(P17)

また子どもに読み聞かせを行う上で、本の選択の悩むという意見をあげた参加者も見られた。そのため過去の読み聞かせの履歴や興味・関心についての分析をもとにしたおすすめの本について提示があると助かるという声があった。

「1 歳の子は 3 歳くらいになるまでは結構読みたい本を伝えるのは多分なかなか難しいと思うので。そういうことができたらすごく助かる。」(P12)

「お子さんによって、食いつくところは違うかもしれない。キーワードで絵本の候補を出してもらっていいかもしれないです。」(P12)

と言った形で年齢や興味ごとを加味した絵本の提示に対する需要があった。

4.7 アプリやデバイス利用への利用意識

システムを開発する上では、どのようなシステム・デバイスが選択肢になり得るかということ踏まえた設計が必要となる。そのため、システムのターゲットユーザとなり得る参加者に、アプリの利用実態やカメラやマイクなどのデバイス利用についてのセキュリティ意識を質問した。まず、現在もしくは過去にアプリを使ったことがあるかという質問に対してはほとんどが利用したことがないという回答であった。その上で 10 人中 6 人がアプリなどのシステムの利用に前向きであるとの答えであった。

「今うかがっている絵本のアプリみたいのはあるっていうのは知らなかった。なるほどですね。」(P12)

一方で多くの親が読み聞かせ中にデバイスを使った操作をすることについて避けているという実態がわかった。

「基本的に読み聞かせをしているときは会話を重視したいのでスマホはさわらずに読み聞かせに集中しています。」(P5)

カメラの利用については 10 人中 5 人が利用について前向きな意見であった。利用することの効果や利便性によって前向きに捉えられるとする参加者がいた。また他のサービスやデバイス利用の経験と絡めてデバイスの許容性を示す参加者もいた。

「手間が省けるといった点では全然もいいですし、行動の方向性とか見えてきたりと思うので、個人情報観点だけ外部に流出しないとかであればいいんじゃないでしょうか。」(P15)

「いまお部屋の見守りカメラとかもあるじゃない

ですか。それと同じような感じなのかなという感じですよ。」(P12)

「例えばリビングだったらリビングだとか寝室とか決まった場所にそのカメラを設置してってなった時は何か他の情報もビッグデータとしてこう参照の対象になるんじゃないかなとかですね。何かそういうと、後はプライバシー的にどうなのかなって考えた時にちょっとやっぱ抵抗あるかなと思います。」(P12)

マイクによる音声取得などについてはほとんどが利用について前向きだった。すでにスマートスピーカーなどのマイクデバイスがあることから、利用に抵抗がないという参加者が多く見受けられた。

「大丈夫かな。だいぶ慣れてきたかなってところがあるので。子供達もやっぱ生まれた時からそのスマートスピーカーがあるような環境だったりするんで。」(P11)

「カメラだとちょっと気になりますけど、マイクとかだったらそんなに気にならないですね。」(P9)

5. 考察

インタビューの結果から、本の読み聞かせを行う子育て親のとりまく環境についていくつかがあきらかになった。子育て子育て親は、子どもが絵本を楽しむことや没頭することに喜びを感じ、それ感じ取れるとまた新しい本を読み聞かせたいという前向きな気持ちを感じる傾向がある。こうした子育て親にとってのやりがいを高めていくためには、子どもが絵本を楽しんでいる様子や没頭している様子を可視化し振り返られるようにすることが効果的であると考えられる。さらに読書履歴などが可視化対象となる情報として挙げられていることなどから、ログの表示と紐付けて親子で楽しんでいるシーンを想起させられるような情報の可視化は有用であると考えられる。

アプリやデバイスなどについての受容性については我々が想定したよりも高かった一方で、読み聞かせ中に操作を必須としないような、読み聞かせ対話に集中できるようにユーザの利用フローについて配慮をする必要性についても明らかになった。このため、読み聞かせセッション中のシステムによる干渉の他に、セッション事後などのフィードバックなどを活用も手段として選択肢入ると考えられる。

また、親子で読み聞かせをしたいタイミングが違うことや兄弟の対応など、親の意欲低下につながる時間や環境に紐づいた要因があることも明らかになった。こうした課題の解決は重要である一方で、こうした意欲低下のパターンは個人によるため千差万別であり、システムによる解決は難しいように考えられる。こうした環境や生活時間帯に依存した課題の解決より、親子の対話型読み聞かせ自体への意欲を向上させることの方が、システムとして解決可能な

課題であると考えられる。

6. システム案

インタビュー結果及び考察を踏まえ、我々は下記のような

- 読み聞かせのセッションの間にデバイス操作をすることなく、読み聞かせとコミュニケーションに意識を傾けられるようなデザイン
- 子育て親に日々の読み聞かせの振り返りを習慣づけ、振り返りや気づきを促せるようなデザイン
- 子どももしくは親子で絵本を楽しんだり没頭している場面を想起し直せるデザイン

またカメラやマイクの利用に対してある程度の受容性があるとの判断から、システムの構成要素としてこれらのデバイスを選択し得るものとした。こうした点を踏まえ、我々は読み聞かせ中ではなく、読み聞かせ終了後のフィードバック提示による子育て親の意欲や行動変化の可能性に着目し、まずは読み聞かせのセッションを中断することなく、事後フィードバックを通じて以降の対話型読み聞かせへの意欲を維持・向上させるためのシステムを検討している。そのためセッション後のフィードバック、振り返りを通して子育て親が日頃の対話型読み聞かせ活動を意欲的に続けられるような、日々の活動をフィードバックするインタフェースデザインを検討している。(図 1)

具体的なユーザのフローとして、読み聞かせ前にスマートフォンなどのカメラを設定してもらい、動画撮影を開始。読み聞かせ終了時に動画撮影を停止してもらい。動画は自動的に解析され、親子の読み聞かせの印象的なシーンを画像として記録、読み聞かせ後に書籍ログや会話ログなどをみてもらい振り返ってもらおうといったようなものになる。こうした記録とフィードバックを繰り返すことで、親の対話型読み聞かせに対する意欲や行動の変化について検証を行うといった流れを想定している。

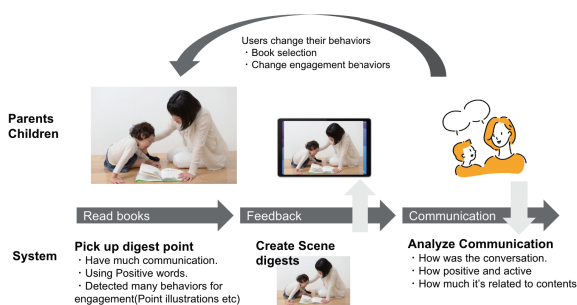


図 1 インタフェースを使用したユーザの体験の流れ

7. まとめと今後の展望

本研究では、親子の読み聞かせ活動支援のためのシステムデザインを目的として、読み聞かせに関しての親子の環境や背景について子育て親に対してインタビュー

本研究では、子育て親が対話型読み聞かせを楽しく続けていくことのできるような支援を可能とするシステムのデザインを検討するために、読み聞かせに際した親子を取り巻く状況についてのインタビューを行い、現在の状況や課題を整理した。読み聞かせ活動に関する子育て親のやりがいや課題、ストレス、アプリやデバイス利用への意識などをヒアリングし、子育て親の読み聞かせに関する現状及び将来的なシステムデザインの可能性に関する洞察を深めた。

今後はシステムデザイン案を元にプロトタイプ開発を行い、子育て親に参加してもらい、またフィードバックをながら協創的にデザインを進めていく。こうした過程を通して実際に親子の読み聞かせへの意欲維持や行動変化につながるようなシステムデザインを目指す。

謝辞

本研究を進めるにあたりご支援いただいた東京大学大学院工学系研究科矢谷研究室の皆様、総合文化研究科の開一夫先生、インタビューに参加して下さった方々に深くお礼申し上げます。

参考文献

- [1] Arnold, D. H., Lonigan, C. J., Whitehurst, G. J. and Epstein, J. N.: Accelerating language development through picture book reading: replication and extension to a videotape training format., *Journal of educational psychology*, Vol. 86, No. 2, p. 235 (1994).
- [2] Bianchi, S. M., Robinson, J. P. and Milke, M. A.: *The changing rhythms of American family life*, Russell Sage Foundation (2006).
- [3] Chow, B. W.-Y., McBride-Chang, C., Cheung, H. and Chow, C. S.-L.: Dialogic reading and morphology training in Chinese children: effects on language and literacy., *Developmental psychology*, Vol. 44, No. 1, p. 233 (2008).
- [4] Dickinson, D. K. and Tabors, P. O.: *Beginning literacy with language: Young children learning at home and school.*, Paul H Brookes Publishing (2001).
- [5] Finkenauer, C., Engels, R. C. and Meeus, W.: Keeping secrets from parents: Advantages and disadvantages of secrecy in adolescence, *Journal of Youth and Adolescence*, Vol. 31, pp. 123-136 (2002).
- [6] Hargrave, A. C. and Sénéchal, M.: A book reading intervention with preschool children who have limited vocabularies: The benefits of regular reading and dialogic reading, *Early Childhood Research Quarterly*, Vol. 15, No. 1, pp. 75-90 (2000).
- [7] Hart, B. and Risley, T. R.: *Meaningful differences in the everyday experience of young American children.*, Paul H Brookes Publishing (1995).
- [8] Jiménez-Iglesias, A., García-Moya, I. and Moreno, C.: Parent-child relationships and adolescents' life satisfaction across the first decade of the new millennium, *Family Relations*, Vol. 66, No. 3, pp. 512-526 (2017).
- [9] Justice, L. M. and Ezell, H. K.: Use of storybook reading to increase print awareness in at-risk children (2002).
- [10] Mermelshstine, R.: Parent-child learning interactions: A review of the literature on scaffolding, *British Journal of Educational Psychology*, Vol. 87, No. 2, pp. 241-254 (2017).
- [11] Patel, S., Segal, A. and Martin-Chang, S.: "I Love

This Story!” Examining Parent-Child Interactions during Storybook Reading, *Early Education and Development*, Vol. 32, No. 3, pp. 385–401 (2021).

- [12] Sénéchal, M. and LeFevre, J.-A.: Parental involvement in the development of children’ s reading skill: A five-year longitudinal study, *Child development*, Vol. 73, No. 2, pp. 445–460 (2002).
- [13] Whitehurst, G. J., Falco, F. L., Lonigan, C. J., Fischel, J. E., DeBaryshe, B. D., Valdez-Menchaca, M. C. and Caulfield, M.: Accelerating language development through picture book reading., *Developmental psychology*, Vol. 24, No. 4, p. 552 (1988).
- [14] Woodward, G. C.: Reclaiming Conversation: The Power of Talk in the Digital Age by Sherry Turkle: New York, NY: Penguin Random House, 2015, 436 pp., ISBN No. 978-1-59420-555-2 (hardback) (2017).